

## 紫外光 (UV-B) を活用したイチゴIPM技術の普及

西播磨地域のイチゴ生産現場では、4月以降のうどんこ病、ハダニ類及びアザミウマ類の多発が減収要因となっている。そこで10月までは薬剤防除を徹底し、本圃定植以降にUV-B照射と天敵放飼を組み合わせることで、2020年はうどんこ病とハダニ類の多発時期を5月下旬以降へ遅らせることができた。

### 内 容

光都農業改良普及センター管内の施設イチゴ生産者は8戸(100a)で、内6戸は経営を開始して5年以内である。例年4月以降に、うどんこ病、ハダニ類及びアザミウマ類が多発し減収している。そこで、うどんこ病対策として、天敵やミツバチへの影響等を考慮し、電球形UV-B(以下UV-B)導入を検討した。

UV-B導入に向け、2018年は農業技術センター病害虫部及び先進農家から情報を収集し、2019年にUV-Bによる実証圃を設置した。

実証圃は、高設栽培で、葉焼けの生じにくい品種「章姫」で設置した。UV-Bとベンチまでの距離を1.2m、UV-B間を6mとして配線した。点灯は、定植15日後から収穫終了までの期間、午後11時から、葉焼けが発生しないことを確認しながら0.5時間から2.5時間へ段階的に延長した。

10月末までは薬剤防除を徹底し、以降は病害虫の発生状況に応じて防除した。天敵は、チリカブリダニ(11月12日、2月7日及び3月10日)、ミヤコカブリダニ(11月12日)及びククメリスカブリダニ(11月8日、2月7日及び3月24日)を放飼した。

うどんこ病はUV-B照度が低い箇所の果実にまれに発生したが、拡大しなかった。このため、11月から翌年4月中旬まで薬剤防除をせず、防除回数は、その後6月上旬までに実施した3回にとど

まった。

ハダニ類も少発生で、収穫期間中の薬剤防除(天敵を除く)は2回にとどまり、例年春に発生していた『糸を張る』状況は発生しなかった。しかし、4月以降にアザミウマ類による被害果実が発生し始めた。

### 今後の方向性と普及上の注意点

UV-Bと天敵を組み合わせた防除で効果を得るためには、事前に薬剤防除により、対象病害虫の発生を抑えた状態で開始する必要がある。

また、照度むらの是正とともに、葉焼け対策として、各施設に対応した、UV-Bとベンチの距離、UV-B同士の距離の調整と、照射時間の調整を行う必要がある。

今後、管内でIPMを進める上では、近年被害が大きいアザミウマ類の対策が課題である。

石井 多恵子(光都農業改良普及センター)  
(問い合わせ先 電話:0791-58-2209)



写真 UV-B 夜間点灯の様子